

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

後のフォロー 指揮官に大切

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



女子レスリングやアメフトなどスポーツの世界で不祥事が続いています。指導者、指揮官のあり方が問われていますが、見ていて若い頃を思い出しました。

29歳のときに転職。中途採用は業務経歴があることから、その会社では「ギョーレキ」と呼ばれましたが、生え抜きに負けまい、追い越せと必死でした。

採用時の面接官だった次長は厳しく、特に文章にうるさい人です。役員会に出す議案書や企画書を書くとき、当時ワープロなど便利な道具はなくリポート用紙に鉛筆書き。頭をひねった自信作を清書して提出すると、大した直しでもないのに、彼は万年筆でグリックリットと丸をつけます。消しゴムで簡単に修正できるのに、一から書き直し。すると別のところをグリックリット。再度書き直し、結局元に戻ることもあり、最初と一緒にやらないかと恨んだものです。

一年ほどしたある夜、「いつも遅くまで頑張るねえ」と声がかかりました。手を止めて見上げると、隣の部の大物部長。「ありがとつごいいます。もうちょっとなので……」などと答えた瞬間、件の次長が飛んできて、猫の首を

つかむように私を立たせ、「部長の前で座ったままとは何だ」と一喝。部長が恐縮するほどの大声で、直属の課長もそばに来ました。生え抜きは皆帰り、安月給のギョーレキなのに仕事はいっぱい。キりました。

その晩、小さなすし屋で課長に不満を吐き出し、「ここはオレのいるところじゃない」と口走ったものです。そのとき、すし屋のおやじさんから「マナちゃん、あんたが悪い。これまで頑張ってきたんだから、もう少し頑張れ」と声がかかりました。

何回か来た店ですが、無口で怖そうなおやじさんと親しく話したことはありません。

にもかかわりず「マナちゃん」と呼び、さらにカウンターの下から「これは祝いだ。持ってけ」とたるまを差し出しました。
のし紙には「祝一週年」と書いてありました。「周が間違っているよ」と言ったとき初めて涙が出ました。課長いわく「次長もギョーレキだから気に掛けてくれるんだぞ。今日も次長のおごりだ」。

文章も次長のおかげで深く書くようになり、読み手側に立つことを教わりました。少しは上手になっています。いたと今は感謝しています。
指揮官には厳しさは必要、大切なのは後のフォロー。そして任せたことが不首尾に終わったとき、壁になってくれるかどうかも不可欠。愛のある監督とコーチの連携、厳しくも温かい時代でした。